

第5章 社会全般

出会い系メディア

「出会い系」はブームか

「出会い系」と呼ばれるメディアが社会的な注目を集めている。その中身は多岐にわたっているが、ここでは「出会い系」の定義を「不特定多数の人間との出会いを提供することを目的とした一連のメディア」の総称だとしておく。これらのメディアは後述するようにこの20年近くをかけてゆっくりと熟成されてきたのだが、特に注目されるようになったのはごく最近の話だ。

試みに毎日新聞社のサイト内にある「インターネット事件を追う」で調べてみると「出会い系」という言葉が出てくる記事が初めて登場するのが2000年6月、その後事件報道の数は少しずつ増加し、2001年に入ってからはいよいよ1か月に2件の割合で事件報道がなされている。しかしながらこれは「出会い系」にまつわる犯罪が増加したことを示す証拠とはならない。むしろ「出会い系」に対する社会的注目度が増したことで、報道されるニュースが増加したと見るべきだろう。

実際、「出会い系」と呼ばれるメディアがどの程度まで普及しているのかを示す統計的なデータは存在しない。ネット上に存在する出会い系サイトのいくつかはPV数や登録会員数などを公開しているが、そのどれもが数字の根拠について説明をしておらず、信憑性に乏しい。

このことは「出会い系サイト」に見られる特徴が、a.出会い系サイトに特有のものなのか b.アクセスする人間の特徴が表れたものなのか c.その両者が関係しているのか d.どちらも出会い系サイトの特徴とは関係ないのか、といった事柄について一意的に決定できないことを示している。それは同時にこの種のメディアを一方的に悪玉と決めつける規制論に根拠がないということでもある。

そこで本稿では、出会い系メディアの

トラブル・事件多発で注目を集めた2000～2001年 その変遷と背景、今後とるべき対策を考える

発展とその背後にあるコミュニケーションを通じて、なぜ出会い系メディアが注目を集めるのか、そこで生じるトラブルに対して我々の社会がどのような対策をとるのかを明らかにしていきたい。

出会い系メディアの誕生

ただ単に人と出会うのではなく、不特定多数と出会うことが可能で、かつそれを目的としたメディアの先駆けはなんといっても80年代に誕生したテレクラである。テレクラは80年代を通じて「電話風俗」としてのポジションを確立していくが、それと同じく電話風俗に数えられるのが「伝言ダイヤル」だ。伝言ダイヤル自体はNTTが1989年に始めたサービスだが、特定のメッセージボックスが不特定多数の人に使用され始め、インターネットの掲示板のような形で用いられ始める。これを男性専用、女性専用などと決め、不特定多数の男女の出会いを斡旋する電話風俗としての伝言ダイヤルが民間で始まり、テレクラと並んで社会問題化する。以来「テレクラ、伝言ダイヤル=アダルト、アンダーグラウンド」というイメージが定着していくことになる。

ところが90年代後半に入って、このシステムが一部の携帯電話会社のサービスとして採用されるようになる。特定の携帯電話会社のキャリアからしか接続できないサービス専用のチャンネルが複数用意されており、その中にコミュニティーチャンネルのような形で用意されていたサービスがそれである。その内容は不特定多数と声のメールをやりとり（伝言ダイヤルと同じ！）したり、直接会話したりといったものだった。これらのサービスが、それまでアンダーグラウンドの出会いのためのシステムだったテレクラや伝言ダイヤルを、一般ユーザーにまで利用させたことの影響は大きいといえよう。

出会い系メディアの無害化

またそれとは別の流れで登場したのが、95年に創刊された個人情報誌『ジャマ〜ル』だった。それ以前にも、雑誌の中に「文通友達募集」などの欄は設けられていたのだが、個人広告による売買、出会い（仲間募集）の専門誌というのはこれが初めてだった。同誌は創刊当初は個人売買や同じ趣味を持つ友達の募集の広告の方が多かったのだが、次第に「出会い系」と名付けられる異性との出会いを求める個人広告の割合が増加、現在では「出会い系」が誌面の約半分を占める。

それとは別に98年にはドラマや映画などの影響で、電子メールによる異性との出会いがブームになる。特にテレビドラマの影響は絶大で、放送中からインターネット上のメール友達募集掲示板には「ドラマのような出会いを求めています」という書き込みがあふれていた。

これらの一連の流れは、出会い系メディアを一般化させ、アンダーグラウンドではない「無害」なものとして人々に認知させる働きをした。この一般化、無害化のプロセスは、現在の出会い系サイトの存在にとっても重要な要因の1つである。つまり、アンダーグラウンドなものと思われていた「出会い系メディア」の敷居が低くなったということだ。

ここで重要なキーワードになるのが「匿名性+無害化」である。匿名のまま他人と出会うことができるメディアは、初めテレクラというアンダーグラウンドで成立したが、それと同じシステムがオーバグラウンドなメディアで採用され、あるいは喧伝されることで無害なものとして認知されていった。と同時に、その匿名性は増大していったのだ。というのも、テレクラや伝言などでは「声」という要素が決定的に重要で、話の内容以外にも、その「声」が相手の、あるいは自分のディテ

ルを伝えるのに対して、その後登場した、出会い系サイトを含む無害化された出会い系メディアでは主として文字だけでディテールを伝えあうことになるからだ。単純な論者はこのことを捉えて出会い系メディアで繋がった相手は、生身の相手と会って話すことに比べて劣るものと考えられるかもしれない。しかしながら実際に出会い系メディアにアクセスしている人間にとっては、相手が文字の情報で「しかない」からこそ、その相手に対する想像をふくらませてしまうのが現状だ。マクルーハンの「ホットなメディア/クールなメディア」という分類を思い出してもらいたい。情報の精細度が低いほど、受け手はそこに自分の解釈を織り込むのである。

コミュニケーションの前提条件

しかしながら、出会い系メディアのオーバーグラウンド化は「匿名性+無害化」という文脈からだけでは読み解くことができない。その背景にはより根本的な、コミュニケーションに関する条件の文脈が存在しているのだ。たとえば学生の頃、教室の中で手紙を回し合った経験のある人は多いだろう。そこで語られるのは、往々にして当事者にとってしか意味のない「秘密の話」だったはずだ。なぜこのようなことが起きるのだろうか。日本のように相対的に人口密度が高い条件の下では、たとえば通信などは対面のコミュニケーションの代替としてのみならず、独自の意味を持って利用されることになる。会って話せばいいのにわざわざ通信手段を利用するのには、「対面ではできない話」をするという目的があるからではないだろうか。

このように考えれば、よく若者たちのメディアを介したコミュニケーションについて「大した用事もないのに無駄話ばかりしている」といった批判が全く的外れであることがわかる。彼らがメディアを介して一見無駄話に見える会話ばかりしているのは、それらのメディアで彼らが

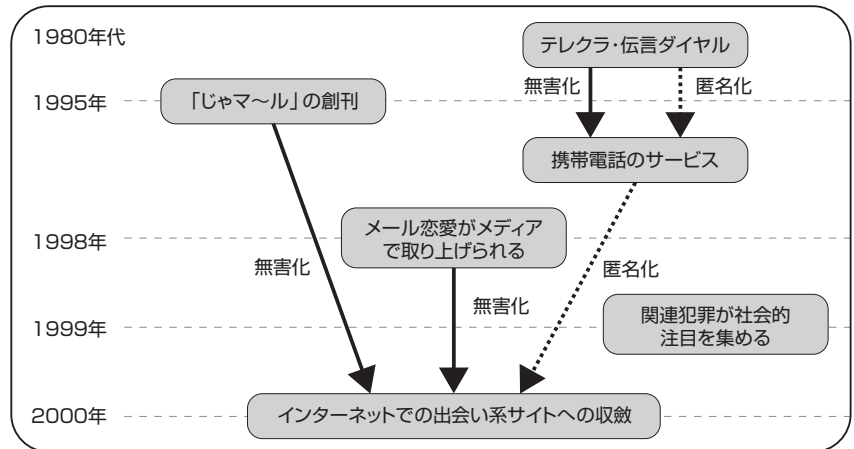


図1 出会い系メディアの発展プロセス

「対面では話せないことを話している」からである。ここでは人間関係を円滑にするためのコミュニケーションが行われているのであって、用件が何かということとはさほど問題にならない。サラリーマンの「飲みニケーション」が、一緒にお酒を飲みに行き、「会社ではできない話」をするのが目的であるのと似ている。若者を中心に、携帯電話が主としてメールのやりとりを目的に使用されていることは複数の調査結果が示すとおりだが、それもこの文脈から理解できるだろう。また、出会い系メディアがその発展過程で「文字」によるやりとりで収斂していったのも、同様の背景が存在する。

「教育」ではなく「学習」を

以上、出会い系メディアがオーバーグラウンド化した要因として、(1) メディアによる無害化と匿名性の増大、(2) メディアを使って対面ではできない話をするコミュニケーションスタイルが存在していた、という2点を指摘した。冒頭にも述べたように現在、「出会い系サイト」をきっかけとした事件やトラブルが注目を集めている。これらの事件がきっかけで出会い系サイトの「匿名性」が問題であるという論調が一部に見られるようになってきた。しかしながらここまで説明してきたように、出会い系メディアにおける匿名性の増大には一連の歴史的経緯が存在し

ているのであり、さらにこれらの事件がすべて、メディアを介して出会った「後」でのトラブルであることを考えても、問題は匿名性にあるのではなく、「人と人との問題」であることがわかる。むしろ匿名性を排して、直接のコミュニケーションこそ大事だと説くことが問題を悪化させるのではないだろうか。というのも、出会い系メディアにアクセスする人は往々にして、そこに「みんなの前ではできない話」をする心理的距離の近さを感じ取っているのであり、それが「直接のコミュニケーション」への動機付けという回路を開いている以上、問題は匿名性ではなく、そこで行われるコミュニケーションにあるからだ。

匿名的コミュニケーションから直接的コミュニケーションへと流れを止められないのなら、むしろメディアの問題というより、そこでの出会い方の作法を学ぶことが重要であろう。それもその作法の伝授（教育）というよりは、一定の年齢に留保をつけた、早い段階からの匿名メディアを通じたコミュニケーションに触れさせることによって、つまり体験による「学習」によって身につけさせるべきである。ただいたずらに直接的コミュニケーションの重要性を説くだけでは、匿名の出会い系メディアに対する学習機会を欠いた人が、いつまた同じように被害者にならないとも限らないからである。

(鈴木謙介 東京都立大学・社会学)



[インターネット白書 ARCHIVES] ご利用上の注意

このファイルは、株式会社インプレスR&Dが1996年～2012年までに発行したインターネットの年鑑『インターネット白書』の誌面をPDF化し、「インターネット白書 ARCHIVES」として以下のウェブサイトで公開しているものです。

<http://IWParchives.jp/>

このファイルをご利用いただくにあたり、下記の注意事項を必ずお読みください。

- 記載されている内容(技術解説、データ、URL、名称など)は発行当時のものです。
- 収録されている内容は著作権法上の保護を受けています。著作権はそれぞれの記事の著作者(執筆者、写真・図の作成者、編集部など)が保持しています。
- 著作者から許諾が得られなかった著作物は掲載されていない場合があります。
- このファイルの内容を改変したり、商用目的として再利用したりすることはできません。あくまで個人や企業の非商用利用での閲覧、複製、送信に限られます。
- 収録されている内容を何らかの媒体に引用としてご利用される際は、出典として媒体名および年号、該当ページ番号、発行元(株式会社インプレスR&D)などの情報をご明記ください。
- オリジナルの発行時点では、株式会社インプレスR&D(初期は株式会社インプレス)と著作権者は内容が正確なものであるように最大限に努めました。すべての情報が完全に正確であることは保証できません。このファイルの内容に起因する直接および間接的な損害に対して、一切の責任を負いません。お客様個人の責任においてご利用ください。

お問い合わせ先

株式会社インプレス R&D

✉ iwp-info@impress.co.jp